

# 2000年度中級作文に見られる語彙・意味に関わる誤用 —初中級レベルにおける語彙・意味教育の充実を目指して—

鈴木 智美  
(2001.10.31 受)

## 1 分析の目的と対象とする範囲

本稿では、東京外国語大学留学生日本語教育センターにおける2000年度学部留学生中級レベル作文の語彙・意味に関わる誤用を分析する。分析の目的は、当センターのみならず広く中級およびその前段階である初級レベルの日本語教育における、語彙・意味教育の充実をはかる一助とすることである。

2000年度（平成12年度）当センターでは、中級文章表現カリキュラムに基づき、予備教育課程学部留学生に対し以下の表1のような課題作文指導が行われた。本稿ではこれらの提出作文からその語彙・意味に関わる誤用を抽出し、初中級レベルにおける語彙・意味指導のあり方を探っていく。

表1 2000年度中級文章表現カリキュラム課題作文

出題日	作文課題	提出日	提出数
8月21日	夏休みの思い出	9月5日	62部
9月14日	自国紹介	9月19日	60部
10月5日	〇〇と私たちの生活	10月17日	62部
10月24日	日本で見たこと	10月31日	60部
11月24日	*反対意見を述べる	11月24日	58部

(ただし\*印の課題作文は、具体的・統一的なテーマのもとに、一定の時間内に辞書などを参照することなく一斉に行われたものである。他の作文課題とは出題形式が異なるため、本稿での分析の対象からはこれを除く。従って本稿で分析の対象とする作文の総数は244部となる。)

## 2 分析の視点

日本語学習者の誤用に関して鈴木（1999）では、名古屋大学等の研究者により作成された作文コーパスを基に、その語彙・意味的な誤用の主な傾向を分析した。その作文コーパスは初級から上級までいずれのレベルをも含むものであったが、

語彙・意味的な誤用に関しては、慣習的に定着した表現（コロケーション（連語）、その他の慣用的な言い回し、漢字熟語）に関わる誤り、および類似の表現との混同（語の意味・音の両側面が関与するもの）があることが観察された<sup>(1)</sup>。

この結果を踏まえ分析を行った結果、当センター中級レベル作文においても、以下の(1)に示すようにほぼ同様の誤用の傾向が観察されることがわかった。

(1) 中級レベル作文に見られる語彙・意味的な誤用の主な傾向<sup>(2)</sup>

(a) コロケーション（連語）の誤り

- 例：(誤) 夏休みは1ヶ月かかった → (正) 夏休みは1ヶ月だった  
(誤) 毎日天気が晴れた → (正) 毎日天気が良かった  
(誤) 帰国する計画を決めた → (正) 帰国する計画を立てた

(b) その他の慣用的な言い回しに関する誤り

- 例：(誤) この経験が大好きだ  
→ (正) これはとても楽しい経験だった  
／忘れられない良い経験になった  
(誤) この悲しい感じは短い時間だけした  
→ (正) この悲しい気持ちは長く続かなかった  
(誤) 初めて会ったのだが、私たちは親しみがありそうだった  
→ (正) 私たちは仲良くなれそうだった／気が合いそうだった

(c) 漢字熟語に関する誤り

- 例：(誤) 問題の重要について考える → (正) 重要性  
(誤) 平均な人 → (正) 平均的な人  
(誤) 飛行機員 → (正) 飛行機の乗務員

(d) 類義表現との混同による誤り

- 例：(誤) 散歩をしてうれしかった → (正) たのしかった  
(誤) 今はその時ととても反対だ → (正) 全く反対だ  
(誤) 情報を習うのに便利だ → (正) 情報を得るのに

以下第3節ではコロケーション（連語）の誤り、第4節ではその他の慣用的な言い回しに関する誤り、第5節では漢字熟語に関する誤り、第6節では類義表現との混同による誤りの主な例をそれぞれ挙げ、初中級レベルにおける語彙・意味に関わる指導のあり方について考えていく。第7節では類義表現との混同に関連

して、当センターの初級レベルにおいて導入される類義の語句を確認する。第8節では本稿のまとめとして、初中級段階を通じ語彙・意味的な側面に配慮した指導が継続して行われることが必要であると考えられること、またコロケーションや類義表現に関し教師や研究者だけでなく学習者のために、簡潔なわかりやすい例文を豊富に記載した辞書等の整備が望まれることを述べる。

### 3 コロケーション（連語）の誤り

語彙・意味的な誤用に見られる主な傾向の一つに、コロケーション（連語）の誤りがある。例えば「風邪をひく」「電話をかける」などの表現において、「ひく」「かける」などの動詞はその補語の名詞との連なりがそれぞれに定着しており、「風邪を持つ」「電話を押す」などと言うことはできない。このようなコロケーションの誤用例には以下の(2)のようなものが観察された。

#### (2) コロケーション（連語）の誤り

(誤) 夏休みは <u>1ヶ月かかった</u>	→	(正) 夏休みは <u>1ヶ月だった</u>
毎日 <u>天気</u> が晴れた	→	毎日 <u>天気</u> が良かった
その町は <u>天気</u> が涼しい	→	その町は <u>涼しい</u>
帰国する <u>計画</u> を決めた	→	帰国する <u>計画</u> を立てた
旅行する <u>予定</u> をした	→	旅行する <u>予定</u> を立てた
<u>アルバイト</u> を働いた	→	<u>アルバイト</u> をした
<u>目標</u> を完成した	→	<u>目標</u> を達成した
<u>目的</u> がよくできた	→	<u>目的</u> を果たした／達した
<u>気持ち</u> がすばらしかった	→	<u>気持ち</u> がよかった／すばらしい気持ちだった
旅行の <u>疲労</u> がなあった	→	旅行の <u>疲労</u> がとれた
悪い <u>経験</u> があった	→	いやな <u>経験</u> をした
寒さが骨まで <u>入る</u>	→	寒さが骨まで <u>しみる</u>
国で過ごす <u>予定</u> をした	→	国で過ごす <u>予定</u> を立てた
金の <u>宝石類</u> を着る	→	金の <u>宝石類</u> を身につける
<u>人口</u> はあまり <u>大きくない</u>	→	<u>人口</u> はあまり <u>多くない</u>
<u>才能</u> を <u>発達</u> する	→	<u>才能</u> を <u>伸ば</u> す
<u>時間</u> をとるとともに	→	<u>時間</u> が <u>経つ</u> とともに

<u>人気が多い</u>	→	<u>人気が高い</u>
<u>機械化が普及する</u>	→	<u>機械化が進む</u> ／ <u>機械が普及する</u>
<u>世界との関係を発達する</u>	→	<u>関係を築く</u> ／ <u>深める</u>

個々の語が適切なコロケーションに従って使用されない場合、不自然な日本語の表現が生じてしまう。例えば「かかる」という語はある時間あるいはある費用が「必要である」という意味において用いられ、単にあることがある期間「続く」ことを表すものではない。この意味が学習者に的確にとらえられていないと、「\*夏休みが1ヶ月かかる」「\*ホームステイが1週間かかる」などのコロケーションの誤用が生じてしまうことになる。

また天気・気候に関する語のコロケーションにも注意が必要であり、「天気が良い／悪い」と言うことはできるが、「\*天気が晴れる」と言うことはできない。また「\*天気が涼しい」と言うのも不自然であり、「(ある場所が／ある季節が)涼しい」と言うのが自然である。他にも「計画／予定を立てる」場合に「\*計画を決める」「\*予定をする」と言うのは不自然であり、また「目標を達成した」場合に「\*目標を完成した」と言うのも適切なコロケーションではない。また「いやな経験をした」時に「\*悪い経験があった」とするのも適切ではない。

このようなコロケーションの誤用に関しては、語と語がどのような結び付きにおいて使用可能なのか、あるいは使用不可能なのかを学習者に意識させるよう繰り返し提示していくことが必要となるだろう。例えば学習者が「風邪」という語を知ったとしても、それが「風邪をひく」というコロケーションにおいて使用されるものであることを習得しなければ、その語が適切に使えるようになったとは言えない。また「ひどい風邪」「かるい風邪」などと言っても「大きい風邪」「深い風邪」「小さい風邪」などとは言えないことなど、それぞれの語について提示すべき点は多くある。

このようなコロケーションに関わる指導は、学習者自身に注意を促す意味でも、初級から中級にかけて継続的にまた長期的な視点において行われた方が良いと思われる。また例えば「とる」「かける」「つく」「あたる」などの多義的な動詞に関しては、その多義的別義ごとにどのような他の語句とのコロケーションが可能なのか指導していくことが必要であろう。

先行研究では小内(1997)がコロケーションに着目した特色ある実例辞典であると言える。名詞と動詞に関し、コロケーションの可能な例が多く挙げられてい

る。ただし補語の格助詞の情報などは記載されていないため、特に多義的な動詞については、初中級の日本語学習者を対象に考えた場合には補いが必要となるだろう。また中村（編）（1996）も各語のコロケーションを簡潔にまとめている。ただし日本語学習者を対象に考えた場合には、例をより豊富に充実させることが必要であると思われる。今後は日本語教師や研究者のためだけでなくむしろ学習者のために、各々の語の可能なコロケーションについて、豊富な例によりわかりやすく示していくことが必要であると思われる。

#### 4 その他の慣用的な言い回しに関する誤り

ある言語社会にはコロケーション（連語）に限らず、その大多数の成員により慣習的に認められ使用される様々な言い回しがある。このような表現は日本語教育においていわゆる指導すべき「文法」項目に含まれるものではないため、その慣習に従わない場合も文法的な誤りということにはならない。しかしその慣習に従わない表現は、日本語の表現として自然さを欠いたものとなってしまう。ここでは以下の(3)に示すような例が見られた。

##### (3) その他の慣用的な言い回しに関する誤り

(誤) この経験が大好きだ

→ (正) これはとても楽しい経験だった / 忘れられない良い経験になった

(誤) この悲しい感じは短い時間だけした

→ (正) この悲しい気持ちは長く続かなかった

(誤) (初めて会ったのだが) 私たちは親しみがありそうだった

→ (正) 私たちは仲良くなれそうだった / 私たちは気が合いそうだった

(誤) (疲れても) 景色がきれいだからいつも力がある

→ (正) 景色がきれいだからすぐ元気になる / 力がわいてくる

(誤) 今年の夏休みはとても珍しかった

→ (正) 今年の夏休みはいつもとたいぶ違っていた  
/ いつもと違うすばらしい夏休みだった

(誤) 夏休みの思い出はきれいだ

→ (正) 私にとって夏休みは美しい思い出だ  
/ 夏休みはすばらしい思い出となっている

(誤) (前の夏休みと比べると) 今年の夏休みはあまり偉大ではなかった

- (正) それほどすばらしくなかった／あまり大したことはなかった  
 (誤) (新幹線は速かったので)  
 きれいなところを長い間見ることができなかった  
 → (正) きれいなところをゆっくり見ることができなかった  
 (誤) 私のお金は速くなくなった  
 → (正) 私のお金はあっという間になくなった  
 (誤) (だめだという返事で) 自分の気持ちが悪くなった  
 → (正) 私はとてもがっかりした／残念だった  
 (誤) レストランでは多すぎる客が食べていた  
 → (正) レストランは食事をする客で大変入っていた  
 (誤) 近代化の方へゆっくり行っている  
 → (正) 近代化がゆっくり進んでいる  
 (誤) 金沢で多くの文化の所に行った  
 → (正) いろいろな場所に行き、金沢の文化に触れた  
 (誤) 事故でたくさんの自動車がその道をあまり良くなく通った  
 → (正) 事故でその道がとても通りにくくなった  
 (誤) (主な産業は観光なので) 自然を世話することは必要である  
 → (正) 自然を(大切に)守っていくことは必要である

例えば例年と異なる楽しい夏休みを過ごした時に、「?夏休みは珍しかった」とは言いにくい。またそのすばらしい思い出を「?夏休みの思い出はきれいだ」としても文法的に間違いではないが、「私にとって夏休みは美しい思い出だ／すばらしい思い出となっている」などとした方が日本語の表現として自然である。また列車のスピードが速く景色をゆっくり楽しむことができない時、景色を「?長い間見ることができない」とは言いにくい。「ゆっくり見ることができない」とするのが自然であろう。またいい返事がもらえずがっかりした時の気持ちを「?自分の気持ちが悪くなった」とするのはやはり自然ではなく、「私はがっかりした／残念だった」などとする方が自然だろう。

このような例を見ると、日本語母語話者にとっては適切な表現かどうかを直観的に判断できるものであっても、学習者にとってはその状況にふさわしい表現を日本語の慣習に従い的確に選択することが決して容易でない場合が多くあることがわかる。

しかしこのような誤用が学習者の文のいわゆる自然な日本語らしさを阻む要因となる可能性があることを考えると、既習の語彙や文法項目がまだ少ない初級の段階から、学習者の作成する文がその状況にふさわしい自然な表現に近づくよう指導していくことが重要ではないかと思われる。学習の初期の段階から長期的な視点を持ち指導を続けていくことは、日本語における慣用的な言い回しに対する学習者の敏感な姿勢を育てていくことにもつながるのではないかと思われる。

## 5 漢字熟語に関する誤り

また学習者の語彙・意味的な誤用の中には、以下の(4)に示すような漢字熟語に関する誤りも見られる。これは(a)不適切な漢字熟語の使用(適切な漢字熟語の不使用)、(b)日本語にない漢字熟語の造語という二つの傾向に分類される。

### (4) 漢字熟語に関する誤り

#### (a) 不適切な漢字熟語の使用(適切な漢字熟語の不使用)

(誤) 問題の <u>重要</u> について考える	→	(正) <u>重要性</u>
<u>多様</u> は私の国のいい点だ	→	<u>多様性</u>
若者の文化は <u>軟らかい</u>	→	<u>柔軟性がある</u>
<u>平均</u> な人にとって	→	<u>平均的な人</u>
電話は <u>革命</u> の物だった	→	<u>革命的な物</u>

#### (b) 日本語にない漢字熟語の造語

(誤) <u>飛行機員</u>	→	(正) <u>飛行機の乗務員</u>
<u>自然的な</u> 植物	→	<u>自然</u> の植物
<u>天然的な</u> 材料	→	<u>天然</u> の材料
<u>家庭成員</u>	→	<u>家族</u> (のメンバー)
たくさんの <u>若員</u>	→	<u>若者</u>
<u>電話費</u>	→	<u>電話代</u>
<u>不安全な</u> 国	→	<u>危険な</u> ／ <u>安全でない</u> 国

ここでは「重要性」「多様性」「平均的」「革命的」また「\*自然的」「\*不安全」などに見られるように「～性」「～的」「不～」などの接辞に関する誤用が見られる。ただし鈴木(1999)と比べると、漢字熟語に関する誤用は比較的少ない。当センターでは中級レベルの文字カリキュラムにおいて漢字熟語の指導も行って

おり、このような指導を継続的に行っていくことは、学習者の漢字熟語に対する注意を促す上で重要なものとなっているのではないと思われる。

## 6 類義表現との混同による誤り

語彙・意味的な誤用に見られる主な傾向の最後のものは、類義の表現との混同である。ここでは以下の(5)のような例が見られた<sup>(3)</sup>。

### (5) 類義表現との混同による誤り

- |                                            |                                      |
|--------------------------------------------|--------------------------------------|
| (誤) 散歩をしてとてもうれしかった                         | → (正) たのしかった                         |
| 家族と別れるのは大変だった                              | → つらかった                              |
| アマゾンでの生活は難しかった                             | → 大変だった                              |
| 私の人格は日本人のようだ                               | → 私の性格                               |
| ホストファミリーは私の <u>実在の</u> 家族ではない              | → <u>本当の</u> 家族ではない                  |
| 田舎の <u>清潔な</u> 空気が感じられた                    | → <u>すがすがしい</u> 空気                   |
| お湯に沈みながら夕日を見た                              | → <u>お湯につかりながら</u>                   |
| 子どもたちは <u>速く</u> 習った                       | → <u>すぐに</u> 覚えた                     |
| 私は3週間日本人の <u>家に</u> 住んだ                    | → 日本人の <u>家に滞在した</u> ／ <u>家で生活した</u> |
| 私は姉より細かったが、今はとても反対だ                        | → <u>全く反対だ</u>                       |
| インターネットは情報を <u>習うの</u> に便利だ                | → <u>情報を得る</u>                       |
| フィジーを <u>訪問する人</u> が多い                     | → <u>フィジーを訪れる人</u> が多い               |
| スピーチの間 <u>いつも</u> 寝ていた                     | → <u>ずっと</u> 寝ていた                    |
| 合格したという <u>情報</u> が来た                      | → <u>知らせ</u> が来た                     |
| 南と北で <u>温度</u> が <u>たくさん</u> 違う            | → <u>かなり</u> 違う                      |
| 農業に <u>富んでいる</u>                           | → <u>農業が盛んである</u>                    |
| <u>文化</u> に <u>富んでいる</u>                   | → <u>豊かな文化</u> がある                   |
| 良識が <u>だんだん豊富</u> になる                      | → <u>良識がだんだん豊か</u> になる               |
| 歴史の本を書き、 <u>国民</u> を <u>起こした</u>           | → <u>目覚めさせた</u>                      |
| 疲れた時に本を読むのは <u>不便</u> である                  | → <u>大変</u> である                      |
| 紙は一番 <u>大変な</u> ものである                      | → <u>大切な</u> ／ <u>重要な</u> ものである      |
| インターネットで自宅から物を買うことは <u>時間</u> を <u>惜しむ</u> |                                      |



	→	<u>時間を節約する</u>
やさしく連絡することができる	→	<u>簡単に連絡することができる</u>
貨物を配達する	→	<u>貨物を輸送する</u>
分解を催促する作用がある	→	<u>分解を促進する</u>
丁寧な表現はあまり <u>共通</u> ではない	→	<u>一般的</u> ではない

ここでは「うれしい／たのしい」「やさしい／簡単な」「難しい／大変な」「豊かな／豊富な」「住む／生活する」「訪れる／訪問する」「とても／全く」「たくさん／かなり」「いつも／ずっと」などの類義表現の混同が見られる。

例えば休暇をとり観光や保養のためにある国を「訪れる」ことは、「訪問する」とは普通言わない。また自然の条件の厳しさの中で生活を続けたことは「難しかった」のではなく「大変だった」と言えるだろう。また程度性のない「反対だ」という概念を強める場合には、「\*とても反対だ」ではなく「全く反対だ」としなければならない。また量的な概念を表すものではない「違う」などの場合は、その程度の大きさは「\*温度がたくさん違う」のではなく「かなり違う」としなければならないだろう。

このような類義表現の誤用に関しても、意味の類似した表現に対し学習者の注意を促すよう、初級段階から継続して指導を行っていくことが根本的かつ長期的な対策となるのではないだろうか。例えば当センターの初級レベルにおいて使用される『初級日本語』のテキストには、次の第7節に挙げるように多くの類義表現が盛り込まれている。従ってこの段階から継続的に、類義表現に関する的確な指導を続けていくことが重要ではないかと思われる。

類義表現の意味記述を行った先行研究には、柴田他（1976, 1979-82）、森田（1989）、類語研究会（編著）（1991）、大野・浜西（1993）、小学館辞典編集部（編）（1994）、北原・鳥飼（1995）、国広（1997）、田他（1998）、広瀬・庄司（編著）（2001）など多くのものがある。今後は日本語学習者のためにわかりやすく簡潔な例文を多く掲げるなど、辞書の記述を充実させていくことが重要な課題となるだろう。

## 7 『初級日本語』において注意が必要な類義語句

当センターの学部留学生予備教育課程では、東京外国語大学留学生日本語教育センター編著『初級日本語』がその初級テキストとして使用されている。このテ

キストに基づき語彙・文法等の導入・練習を行う場合、注意が必要であると思われる類義の語句には以下の表2に挙げたようなものがある。これらの語句の意味の違いはそれぞれのコロケーションの違いとも密接に結び付くものであり、初級段階からの的確な指導が必要であると思われる。

以下各々の語句の次に挙げる文は、『初級日本語』の「本文会話」あるいは「文型・語彙」において、その語句の導入が行われる文である。語句の次に（未提出）と記したものは、『初級日本語』では導入されていないが適宜提示してもよいと考えられるものである。

表2 「初級日本語」において注意が必要な類義の語句

<p>みなさん（1課）／みんな（7課）          みなさん、このかたはやまもとせんせいです。          学生はもう<u>みんな</u>きましたか。</p>
<p>たても（2課）／ビル（6課）          あのたてものはりょうです。          あの<u>ビル</u>の一かいにいろいろなみせがあります。</p>
<p>うち（2課）／<sup>いえ</sup>家（11課）          やまださんの<u>うち</u>はどこですか。          わたしは毎あさ九時ごろ<u>家</u>をでます。          さとうさんの<u>家</u>へはどう行きますか。</p>
<p>ごはん（3課）／<u>しょくじ</u>（3課）          がくせいはまいにちりょうの<u>しょくどう</u>で<u>ごはん</u>をたべますか。          マリアさんは日よう日にりょうで<u>しょくじ</u>をつくりますか。</p>
<p>けん（4課）／<u>きっぷ</u>（6課）          おおきい<u>こうえん</u>ですね。どこで<u>けん</u>をかいますか。  <u>きっぷ</u>を一まいください。</p>
<p>生年月日（4課）／<u>たんじょう日</u>（4課）          ジョンさんとわたしの<u>生年月日</u>はおなじです。          きのはまなさんの<u>たんじょう日</u>でしたか。</p>
<p>ところ（8課）／<u>場所</u>（13課）          （子どもの時、）<u>どんなところ</u>であそびましたか。          その店はどこにあるか、<u>場所</u>をおしえてください。</p>
<p>戸（10課）／<u>ドア</u>（12課）</p>

<p>すみませんが、<u>戸</u>を開けてください。 この<u>ドア</u>は開いたり閉まったりします。</p>
<p>ひこうじょう (10課) / くうこう (未提出) わたしはあした<u>ひこうじょう</u>へ友だちをむかえに行きます。</p>
<p>ていりゅうじょ (10課) / バス停 (未提出) わたしはあした<u>ていりゅうじょ</u>へ友だちをみおくりに行きます。</p>
<p>する (3課) / (やきゅうを) やる (11課) あなたはテニスを<u>します</u>か。 子どもたちが<u>やきゅう</u>を<u>や</u>っています。</p>
<p>おく (12課) / のせる (12課) わたしはつくえの上に<u>さいふ</u>をおきました。 父はたんずの上に<u>かばん</u>を<u>の</u>せました。</p>
<p>閉める (10課) / 閉じる (12課) まどを<u>閉め</u>ないでください。 このにぎょうは目や口を開けたり<u>閉じ</u>たりします。</p>
<p>すうじ (13課) / かず (16課) 日本では「四」という<u>すうじ</u>はいいすうじではありません。 おとうとはきょねんは<u>かず</u>がかぞえられませんが、今年のかぞえられるようになりました。</p>
<p>(しゃしんを) とる (4課) / (写真を) 写す (14課) あそこで<u>しゃしん</u>を<u>と</u>りましょう。 あの子の<u>写真</u>を<u>写</u>したいです。</p>
<p>食べ物 (14課) / 食料 (17課) ハイキングの時は、何か<u>食べ物</u>をもって行きなさい。 マナさん、<u>食料</u>はもう車にのせましたか。</p>
<p>ダンス (14課) / おどり (19課) ジョンさんは<u>ダンス</u>が上手です。 広場で<u>ぼんおどり</u>が始まりましたよ。……<u>おどり</u>が上手ですね。</p>
<p>てつだう (15課) / 助ける (22課) わたしは毎日母の仕事を<u>てつだ</u>っています。 友だちはわたしを<u>助</u>けてくれました。</p>
<p><u>はじめて</u> (15課) / <u>初めに</u> (23課) / <u>初めは</u> (28課) <u>はじめて</u>りょうへ来た時、げんかんでくつをぬがなければなりませんでした。</p>

初めにどちらへ行きますか。  
やっぱり、初めはみんなそうらしいですね。

用意 (17課) / じゅんび (22課)  
さあ、夕食の用意をはじめましょう。  
マリアさん、スピーチのじゅんびはできましたか。

もっと (15課) / ずっと (18課)  
わたしももっと体をじょうぶにしなければならぬとおもっています。  
かとう医院は中央病院よりずっと近いです。

(農業を) やる (19課) / (先生を) する (19課)  
りょうしんはいなかで農業をやっています。  
兄はまだ独身で、横浜で先生をしています。

ちゅういする (10課) / 気をつける (20課)  
あぶないから、ボールやバットにちゅういしてください。  
表の通りは危ないから、車に気をつけて帰ってください。

かたづける (20課) / しまう (22課)  
もうおわりましたから、どうぞ。すぐ、このへんをかたづけます。  
財布やパスポートは、いつも引き出しにしまっておきます。

それでは (21課) / それなら (21課)  
それでは、会議が終わったら、すぐ呼びます。  
それなら、わたしの家へあそびに来てください。

若者 (22課) / 若い人たち (24課)  
日本の若者にあなたの意見をいろいろ話して来てください。  
この本は、写真が多くて、おもしろいので、日本の若い人たちにもよく読まれています。

招く (22課) / さそう (22課) / 招待する (24課)  
こんなすばらしいとうろん会に招いていただいて、ありがとうございました。  
マナさんは友だちを音楽会にさそってあげました。  
わたしはマナさんに留学生のパーティーに招待されました。

きれいな (6課) / 美しい (23課)  
きれいなさかなですね。  
今の季節は美しいもみじが見られるでしょう。

げんきな (7課) / けんこうな (23課)  
マナさん、げんきになりましたね。

あの子どもたちは、けんこうそうです。

おおきい (2課) / 大きな (24課)

おおきいパンは六十えんです。

大きな神社へ行ったのですが、ひどい目にあってしまいました。

ちいさい (2課) / 小さな (24課)

ちいさいパンは四十えんです。

今度は、近くの小さなお寺におまいりするつもりです。

うつ (10課) / なぐる (24課) / たたく (24課)

きょうはボールのなげ方やうち方のれんしゅうをします。

弟は兄に顔をなぐられました。

弟は兄にかたをたたかれました。

でんしゃ (5課) / きしゃ (11課) / 列車 (25課)

さとうさんはおおさかまでふねでいきます。それから、うちまででんしゃでいきます。

このきしゃにのって、きょうと駅でおりて、タクシーで家まで行きます。

大雪で列車が不通になることもあります。

進む (25課) / 進歩する (25課)

カメラの技術はずいぶん進んできました。

科学はこれからもどんどん進歩していくでしょう。

とても (5課) / だいぶ (8課) / 非常に (25課) / 大変 (25課) / ずいぶん (25課)

(やすみの日は) とてもいそがしかったです。

(日本のりょうりはフィリピンのりょうりと) だいぶちがいます。

けしきはすばらしいですが、現実の生活は非常にきびしいですよ。

雪は大変重いのです。

カメラの技術はずいぶん進んできました。

たのしい (5課) / うれしい (23課) / 幸せな (26課)

(やすみは) とてもたのしかったです。

今日はほんとうにうれしいです。

(幸せな時でも不幸せな時でも) いつでも家族はいっしょでした。

せんもん (9課) / 専攻 (27課)

せんもんのじゅぎょうはむずかしいですか。

わたしは教育学が専攻なので、日本の小学校を見学したいのですが、どこか紹介していただけますか。

テキスト (14課) / 教科書 (27課)

テキストの十ページを開けなさい。  
教科書の図のとおり、順番に実験してください。

食塩 (27課) / 塩 (27課)

つぎに、氷の中に、食塩を三分の一ほどまぜてみなさい。  
料理の本のとおり、塩やさとうを入れなさい。

こんな (20課) / このような (20課) / こういう (27課)

わたしも、統計のべんきょうのために、こんなパソコンがほしくなりました。  
こういう実験はじゅんびが大変でしょうね。  
(「このような」の例文はなし。)

使い分けに注意の必要な類義の語句はこのように初級段階でも多い。中級レベルではさらに多岐にわたるようになる。このため類義語句に関する指導は初級から中級にかけて、早い段階から継続的に行っていくことが必要ではないかと思われる。

## 8 まとめ

本稿では、東京外国語大学留学生日本語教育センターにおける2000年度学部留学生中級レベル作文の語彙・意味に関わる誤用を抽出し分析した。鈴木 (1999) にて明らかになった誤用傾向を参考に分析を行った結果、コロケーション (連語) の誤り、その他の慣用的な言い回しに関する誤り、漢字熟語に関する誤り、および類義表現との混同による誤りというほぼ同様の誤用の傾向が明らかになった。

本稿での分析は、決してこれらの誤用を全て未然に防ごうと意図するものではない。既習の文法項目や語彙が限られた初中級の段階で学習者が様々なことを表現しようと試みた時、その作文に誤用が生じるのはむしろ当然のことである。重要なことは言うまでもなく、教師がそれらの誤用から指導上のポイントをつかみ出し、教育に反映させていくことであろう。

本稿では語彙・意味的な側面に配慮したきめ細かい指導を、初中級段階を通じて継続して行っていくことが重要ではないかと考える。文法的には正しく、また学習者の表現意図が推測可能なものであっても、日本語として不自然さを感じさせる表現であれば、それができるだけより適切な表現に近づくよう初級の段階から指導していくことを考えたい。またコロケーションや類義表現に関しては、日本語教師や研究者だけでなく学習者のために、簡潔なわかりやすい例文を豊富に記

載した辞書等の整備を進めていくことも必要である。そのための基礎研究もおろそかにしてはならないだろう。

また本稿において述べたようなコロケーションの問題は、中上級レベルにおいては多義性の問題とも絡み、さらに多岐にわたり重要性を増すようになる。当センターの中級レベルにおいて使用される『中級日本語』のテキストでは、例えば「ツク」という語については「害虫がツク」「列の後ろにツク」「～という字がツキている」「誤差がツキまとう」「気がツク」「鼻にツク」「説明がツク」「想像がツク」「取り返しがツカない」などの様々な表現が現れる。あるいは「目」という語一つをとってみても「目をとめる」「目を見合わせる」「日本料理は目で食べる」「目は口ほどにものを言う」「目で見ることのできる知識」「感情のこもった目つき」などの様々な表現が導入されるようになる。同様に「～をもたらす」という表現について『中級日本語』および『上級日本語』のテキストでは、「知識」「不利益」「被害」「絶滅」「葛藤」などの様々な語が共起可能であることが示されるようになる。いわゆる「文法」とは異なる語彙・意味的な観点からこれらの中上級の表現について整理し、それを教育現場に役立てていくことを今後の課題としたい。

## 注

- (1) 鈴木 (1999) では語の漢字使用に関わる誤りについても検討し、他の漢字との混同が生じている場合には漢字の意味・音・形の類似性が関与していること、また文脈上近接した他の漢字との混同も見られることがわかった。また不正確な表記、送りがなの誤り、漢字熟語における一部の漢字の脱落・漢字の順序の逆転なども見られた。
- (2) ただしコロケーションの誤りが類義表現との混同によって生じるなど、複合的な誤用例も見られる。
- (3) また類義の表現との混同とは言えないが、英和辞典の使用により引き起こされたのではないかと考えられる語彙・意味的な誤用も見られる。例えば「スポーツ番組での選手の面接→(正) インタビュー」(interview)、「時間を頼む→(正) たずねる」(ask)、「鈍い生活→(正) 退屈な/単調な生活」(dull) などがその例である。

## 引用文献

- 大野 晋・浜西正人 (1993) 『類語国語辞典 (第七版)』角川書店
- 小内 一 (1997) 『究極版逆引き頭引き日本語辞典』講談社 α 文庫
- 北原保雄・鳥飼浩二 (1995) 『同音語同訓語使い分け辞典』東京堂出版
- 国広哲弥 (1997) 『理想の国語辞典』大修館書店
- 柴田 武・国広哲弥・長嶋善郎・山田 進 (1976) 『ことばの意味 1 - 辞書に書いてないこと』平凡社選書
- 柴田 武・国広哲弥・長嶋善郎・山田 進・浅野百合子 (1979-82) 『ことばの意味 2, 3 - 辞書に書いてないこと』平凡社選書
- 小学館辞典編集部 (編) (1994) 『使い方の分かる類語例解辞典』小学館
- 鈴木智美 (1999) 「意味的な誤用に見られる主な傾向 - 慣習的に定着した表現および類似の表現に関わる誤り -」『日本語学習者の作文コーパス: 電子化による共有資源化』平成 8 年度~平成10年度科学研究費補助金 (基盤研究(A) (1)) 研究成果報告書 (研究課題番号 08558020) 研究代表者: 大曾美恵子 (名古屋大学大学院国際言語文化研究科教授) pp.131-145
- 田 忠魁・泉原省二・金 相順 (1998) 『類義語使い分け辞典』研究社出版
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター (編) (2000) 『初級日本語』凡人社
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター (編) (2000) 『中級日本語』凡人社
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター (編) (2000) 『上級日本語』凡人社
- 中村 明 (編) (1996) 『文章プロのための日本語表現活用辞典』明治書院
- 広瀬正宜・庄司香久子 (編著) (2001) 『(新装版) 日本語使い分け辞典』  
(*Kodansha's Effective Japanese Usage Dictionary.*) 講談社インターナショナル
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 類語研究会 (編著) (1991) 『正しい言葉づかいのための似た言葉使い分け辞典』創訳社出版



# **Error Analysis of Intermediate Level Written Compositions : Lexical and Semantic Education from Elementary through Intermediate Level Japanese**

**SUZUKI, Tomomi**

The purpose of this paper is to analyze lexical and semantic errors found in intermediate level students written compositions and to show their significance for elementary and intermediate levels of Japanese language education.

Here, I analyzed 244 compositions written during the year 2000 by intermediate level undergraduate students from the Japanese Language Center for International Students, Tokyo University of Foreign Studies. I identified the following 4 types of lexical and semantic errors.

- (1) Errors in lexical collocation
- (2) Errors in conventional expressions
- (3) Errors in Kanji (Chinese character) compound words
- (4) Errors in synonymous words and phrases

This analysis concludes that an educational emphasis on lexical and semantic aspects, particularly those noted above, should be given the same attention in elementary through intermediate level Japanese education as is given to grammar education at these levels.